経済学研究四十年を回顧して

建林正喜

旧臘、本学経済学部研究会の月例会で「経済学研究四十年を回顧して」と題し、おこがましくも敬愛する先輩、同僚の前で、わたくしはじぶんの研究歴を話す機会を与えられた。しかしあとでその録音を聞いて、その調子が余りにもリラックスしていて漫談調であり、肝心なわたしの学問的関心の中心の所在も不明であって、それをそのまま転載するのは本誌のような学術誌にふさわしくないことに気付いた。ここに改めて私の履歴についてしたためる機会を与えられた編集委員の方々の御厚意にたいし深くお礼を申し上げたい。

わたしがどんな経歴で今日に至ったか、またわたしの学問的関心がどんなふうに推移してきたかは、本誌掲載の略歴および業績をみていただければ察していただけることと思う。したがってここでは、その活字の裏にある楽屋咄めいたことを読んで頂くことになる。

経済学部学生の大部分の諸君がそうであるように、わたしもはじめから経済学を勉強しようと思ったわけではなかったし、いわんや経済学の教師になろうなどと夢にも思わなかった。勉強したいと思ったのが文学、とくに英文学だったのは本当であり、そして（全く笑止千万にも）志望が作家であったのも本当である。中学校の隣村は国木田独歩の出身地であり、三年生のときコリンズ版アンデルセンの『フエアリー・テールズ』の原書を速読し

て下さった先生の風格は、強烈な印象になって残っている。つまり中学校、高等学校を通じてわたしは青白い一文学少年、文学青年であった。昨秋、ながいあいだ『日本少年』の編集者であった詩人有本芳水老先生の水墨展示会が京都で催されるについて、その発起人の末席を汚したところからみると、雀百まで踊り忘れぬ類とでも云おうか。

わたくしを経済学に逐いやった動機の一つは、これもまた大部分の学生諸君においてそうであるように、全く私的で、そして功利的なものであった。つまりはやく親父を失った長男のわたしにとって、いちばん就職に有利であろうという期待であった。しかし大学に入る前後、同郷の大先輩河上肇先生の『貧乏物語』に出会ったとき、これはこの功利的期待をふっとばし、心の底からわたしをゆさぶる開眼の一書になった。大学の講義はカール・メンガーだったが、わたしの関心は『貧乏物語』をきっかけに高畠訳『資本論』（改造社）、同じくカウツキーの解説本『マルクス経済学』（日本評論社）に向い、それを新聞部の連中と一しょに読んだ。

わたしが経済学の教師になったきっかけは二つあった。一つは大学を出たのが昭和七年、日本経済は世界「大恐慌」の真っ唯中でのたうち回っていた。就職口などめったにあろうはずがなかった。もう一つは偶々昭和八年、現在の人口問題研究所の創立記念の懸賞論文「わが国人口問題の解決方針如何」に応募し、それが上田貞次郎博士のおめがねに叶って当選したことであった。当時の支配者階級は大恐慌のもたらした失業や農村の疲弊を、御他聞にもれず「人口過剰」としてとらえたのであった。推薦して下さる先輩があって、わたしは昭和高等商業学校（現大阪経済大学の前身）の先生になり、国際経済論や国際金融論を主に講義した。まったくわたしには経済学の先生ッカ就職はなかったのである。

大恐慌はドルとポンドの両極基軸通貨をはじめフランその他めぼしい通貨を投機の餌食にし、世界金本位制度は崩壊した。金を世界貨幣の王座からひきおろし管理通貨制度が登場した。それは恰かも現状を髣髴とさせる。世界経済はブロック化し、ファシズムが抬頭した。ソビエトでは平行本部事件、合同本部事件が相ついでおこり、スターリンの陰惨な独裁が確立した。世界中が暗かった。そのなかで戦争の不吉な予感にわたしたちは戦いた。そしてこの予感は適中した。歴史はくり返すものであろうか。いやくり返しを許してはならない、というのが現在のわたしの実感である。

そうした世界の動きの中で、わたしはブロック経済の基礎となるアウタルキー理念がもっている反動的な性格を、ドイツのばあいについて検出しようとした。日本のばあいについてそれを行なうことは天皇制の批判につながる。わたしのなしうるところではなかった。もはや英米の経済学すらも白眼視され、狂気の「皇道経済学」が幅を利かせた時代であった。わたしがケインズ『一般理論』の原書を入手して友人たちと輪読したのは昭和一二年暮であったけれども、その会もいつとはなしに中断した。

昭和高商在任六年間、当時京大教授だった黒正巌先生が校長を兼ねられ、その温い庇護と激励は、わたしには忘れ難い感激であった。先生はスケールの大きいリベラリストだったと思う。昭和一六年五月彦根高商に転任したときも先生は喜んで送り出して下さった。彦根でわたしが担当したのは統計学、支那金融論であったが、その他先任大家の先生方が敬遠した「あらゆる」科目がまわってきた。保険論、交通論、倉庫論、外書講読等。いまになってみると、深く入るためには間口をひろげねばならない、それらはみんなあとでわたしにはプラスになった。とりわけ解析統計学の基礎になる数学について、指導激励下さった園正造先生の御恩は忘れられない。

昭和一七年九月わたしは南方経済調査の課題をもって、文部省から当時ジャワ天国、ビルマ地獄といわれたビルマに派遣された。陸軍司政官とは名だけのこと、軍人、軍馬、軍属という序列の最下位である。わたしがビルマをえらんだのは、インフレが典型的な形であらわれていた国だったからで、船がラングーン港についたその瞬間から、ビルマが独立し、お役御免になって帰国するまで連日激しい空襲に遭った。配属されたのは満鉄調査班であって、そこでわたしは調査の方法と意義をはじめて学び、そのときの満鉄調査部との縁で戦後、手嶋正毅君を大阪市大研究所からスカウトし、さらに当時中央大学にいた高木幸二郎教授を識るようになった。

昭和一八年暮れにわたしは南方から帰り、翌年五月京城経専に赴任した。担当は統計学と経済政策とであったが、勤労動員の連続でもはや日本の敗運は歴然としていた。民族を解放するのはその民族以外にはない。アジアの盟主日本などとは、日本支配者層の思い上がりだった。

昭和二〇年一一月冷い霖雨の中を仙崎に上陸したわたしには、二度と教師に復帰する意志はなかった。しかし偶々間もなく各府県にひらかれた労働学校開設にひき出されたことが、はしなくも教師復帰の機縁になった。原爆で残っていたわたしの蔵書は、昭和のはじめ一冊一円、円本と称した時代のマルエン全集、まえに述べた高畠『資本論』だけであった。それにケインズ『一般理論』と海賊版のヒックス『価値と資本』がわたくしの労働学校と、大学での講義の種本になった。考えてみるとマルクスもケインズも大学では全く教わったことがなかった。どちらもセルフトートであった。わたしは必死になって『資本論』を読みなおした。つねに具体的な労働者諸君の問題提起と、地域産業の実態調査とが、『資本論』のほんとうの読み方を教えてくれた。北村元一君とは出身高校のつながり以外に、中四国調査所（その大部分が満鉄調査部関係者だった）とのつながりで知り合った。

広島大学政経学部では国際経済論を講義し、工学部経営工学科では経済原論でヒックスとケインズの講義をした。この原論はわたしが立命に赴任するまで、毎年松山商大でも特講で講義した。その第一回のとき眼を輝かせてわたしの講義をきき、ずば抜けてよくできた学生があった。それが安井修二君であり、神戸大学大学院に進んだ彼を指導して今日あらしめた指導教授のひとりが、国際的にも令名ある置塩信雄教授であった。

とにかくわたしはまったく自学自習でマル経、近経二つの経済学を講義しようと決心し、決心した以上はやらざるをえないような環境を自らえらんだわけである。そのなかでわたしが、或る日、英訳東独本レーニン『帝国主義論』を使ってゼミをやっていた途中でふっと感じたのは、『資本論』と『帝国主義論』とは果してこのままで結びつくのかどうか、つまり帝国主義を規定する基本的経済法則は何か、この法則の作用規定をもって資本輸出を説明するのに外国貿易を無視することはできまい。また財政を無視しては独占資本と国家権力の癒着は考察できないであろう。わたしがまず外国貿易を中心に『外国貿易と産業循環』を書いたねらいはこの問題提起にあった。そしてこの問題提起にすばやく共鳴して頂いたのは、畏友高木幸二郎教授であり、今は亡き松井清教授であった。そして松井教授の指摘に応えて、残された独占と再生産の問題をとりあげ『増補外国貿易と産業循環』を書きあげるのに一〇年かかったのは、全くわたしの愚鈍という外はない。

今わたしには立命館で（正確には広島大学いらい二十年にわって）講義した近代経済学批判の研究をまとめる仕事が残っている。ひとはわたしに、近経とマル経をともに勉強して矛盾を感じないかと、半ば非難するように訊ねる。マルクスが自学自習したのは決してプロレタリア経済学ではなかった。ブルジョア経済学であった。あえて自らをマルクスに擬するつもりは毛頭ないが、この教訓は尽きせぬ含蓄をもっている。

顧みれば一〇年、わたしが立命館に赴任して学んだのは、学問は、とりわけ経済学は平和と民主主義のためになければならないということであった。わたしは学園紛争を通じ血みどろ汗みどろの中で体験を通じてそのことを知った。しかしわたしは同時にこのしんどさときびしさのために井上晴丸君をはじめ敬愛する多くの同僚を喪ったことを認めざるを得ない。その中でわたしがどうにか今日まで生きながらえることができたのは、末川先生をはじめ多くの諸先輩、同僚の温い庇護の賜ものであった。この機会をかりて心からお礼申しあげたい。また記念号にわたしへの変らぬ友情のしるしを寄せて頂いた執筆者、特に学外執筆者の諸氏にたいし衷心感謝の意を表したい。